

『ゲオーポニカ（第20巻）』 翻訳と注釈（2）

著者	伊藤 正
雑誌名	鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編
巻	60
ページ	65-74
別言語のタイトル	Translation and Commentary on (Geoponica) XX
URL	http://hdl.handle.net/10232/8780

『ゲオーポニカ（第20巻）』翻訳と注釈（2）

伊藤 正*

(2008年10月30日 受理)

Translation and Commentary on ΓΕΩΠΟΝΙΚΑ (Geoponica) XX

Iro Tadashi

解題

この巻の内容は魚に関するものであるが、第1章などわずかな章を除くと、主に漁獲に関わるものが大半を占める。漁獲の方法として、仕掛け網、投網、釣針、釣糸、釣竿（葦）を用いたものおよび釜によるものが確認できる。漁獲の際に用いられる餌の調合についてはかなり詳細にかつ具体的に記述されている。餌は釣針に付けて用いられるが、仕掛け網、投網の場合に餌は海に（あるいは川に）投げ入れられる。餌の投げ入れは投網の場合は網を投げ入れる直前（12.1）、仕掛け網の場合は仕掛ける何時間前といった具合（2.1;4）に指示がなされている。釣針はアンキステウリオン、アンキステウロンと呼ばれているが（7.1;25.2）、23章ではシデーリアと呼ばれていて、それが鉄製であったことが分かる。アンキステウリオンはアンキステウロンの指小辞であるから、小型のものであったと言えよう。葦が道具として用いられているが（24.1;25.2）、その用途は定かではない。最初の箇所ではカラモスの指小辞であるカラミスコスが用いられている。25章2節には、「4本ずつ釣針の付いた2本の葦」という記述があり、この場合「2本の葦」は釣竿ではないかと推定される。またここで用いられている釣針はアンキステウロンと呼ばれているので、小型のものではないことになる。更に、釣針に着色して、ルアーの如く使用したと思われる例もある（23）。釜の材質、形状および使用法についてはよくわからない。ただ、葦などを編んで作った可能性がある。

この巻で言及されている水生動物の種類は68種。すなわち、ボラ、アカエイ、カサゴ、エロップス¹、タイ、カルケウス、スカロス、グラウコス²、アカボラ、カツオ、ダツ、美魚³、マグロ、マアジ、サクトス⁴、黒い尾の魚⁵、スマリス⁶、アタマ⁷、多足、キツネザメ、ボークス⁸、ネズミ、モルミュロス、スミュレー⁹、コウイカ、ポーキス¹⁰、オオエビ、シビレエイ、ニジベラ、アラベース¹¹、サルギオン、小エビ、カラキアス¹²、ウシノシタ¹³、ヘダイ、アレアントウリス¹⁴、イワシ、イッロス¹⁵、アニオス¹⁶、若マグロ、ハゼ、ゲナリス¹⁷、ダコス¹⁸、コイロス¹⁹、サメ、

* 鹿児島大学教育学部 教授

レピドトス²⁰、ハタ、レウコーピス²¹、ウツボ、コガラス²²、ウナギ、ホラガイ、ラティロス²³、ムラサキガイ、スズキ(以上、7章)。ナマズ(8、21章)、ゴカイ(14章)、カキ(18章)、テュプリーノス²⁴(19章)、エングラウリス²⁵(24章)、キサゴ²⁶(27章)、サルペー²⁷(38章)。トウゴロイワシ、^{マイニディオン}雑魚イワシ、カタクチイワシ、^{マイニス}イワシ、トカゲウオ(マアジ)、サバ(以上、46章)。魚類は海水魚、淡水魚および汽水魚が現われる。その他には、サメ、エイなどの軟骨魚類、コウイカなどの軟体類、貝類としての殻皮類およびオオエビなどの軟殻類(硬皮類)が挙げられている。仕掛けとしての餌に関する記述がこの巻のほとんどを占める。植物や動物の血液など多種多様のものを混ぜ合わせて餌が作られている。また餌を調合する際の物の量を示す単位として、固形物にはムナ(436.6g)、ドラクマ(4.37g)、グランマ(1/24オンス)およびコイニクス(1.094ℓ)が、液状物にはコテュレー(0.2736ℓ)が用いられている。

漁獲に関わる記述以外で重要なのは、1、6および46章である。1章はため池における魚の養殖と与えられるべき餌についての記載である。6章は、特徴による魚の分類に関する記載。また、7章以下の魚の餌に関する各章の著者4名、すなわちアスクレーピオス、マネトー、パクサモス、およびデーモクリトスの名が列挙されている(6.3)。46章は特にユニークである。そこではガロスと呼ばれる魚醬の製法が詳述されている。

『ゲオーポニカ』

第20巻

以下の内容がこの巻、つまり『農業に関する選集』の第20巻に含まれる。魚の養殖、および様々な場所から一つの場所に魚を集めること、また漁獲、およびあらゆる種類の餌の配合、川や海の様々な魚の捕獲に効果があることについて。

第1章 プローレンティノスの『魚の養殖について』

1. ある程度のため池が内陸に作られるべきである、人が欲しかつ可能な程に、またため池は淡水(河水)魚で満たされるべきである、あるいはまた汽水魚は海水から淡水に移し替えられるべきである。2. で、海あるいは池の近くの人々は、もし特にある種の魚が海水域で育てているならば、それを人工池に投げ入れる。3. 土地の自然に従って収容すべきである、もし一方で沼沢地であれば、沼沢地の魚を、もし他方で岩場の河岸であれば、いわゆる岩魚を投げ入れるべきである。4. で、食べ物が更に投げ入れられる、最も柔らかい草が、また最も小さい魚が、また魚の^{えら}鰓と内臓が、また小さく切られた柔らかいイチジクの実が、また柔らかいチーズが、海水魚と岩魚にとって、また小エビが、またハゼが、あるいは、誰かがその種のものを有しているならば、それが、あるいは^{ぬか}糠で作られたパンが、あるいは小さく砕かれた干しイチジクが。5. で、至る所により多くの魚がいるであろう、もしあなたがポリュスポロス草を、小さく砕かれたポリュゴノスを思わせる草を、魚を飼っている水に投げ入れるならば。

第2章 オッピアノスの『魚を一ヶ所に集めること』

1. メグサハッカ、セイバリー、オレガノ、マヨラナの各々3ドラクマずつ、乳香樹皮、ミルラ、シノーピス²⁸、各8ドラクマずつ、よい香りのブドウ酒で溶かれた挽割り大麦2分の1ムナ、焼かれた豚の肝臓24ドラクマ、山羊の脂肪を同量、ニンニクも同じ量を、個々に砕いて、次に細かい砂を混ぜて、そして1時間あるいは2時間前にその場所に投げ入れて、その辺りに網を仕掛ける。2. で、砕かれ篩^{ふるい}にかけられた雄性のヒエンソウを投げ入れる人々は、手で捕えることができるほどの魚を誘き寄せる。3. で、ある人々はニンニクを2分の1ムナ、あるいは煎りゴマを同量、メグサハッカ、オレガノ、ジャコウソウ、マヨラナ、セイバリー、野生の干しブドウの各々32ドラクマずつ、挽割り大麦1ムナを捏ねて、同量の挽割り小麦、乳香樹皮16ドラクマを土と糠で混ぜて、投げ入れる。

第3章 デイデュモスの『川魚を釣ること』

羊の脂肪、煎りゴマ、ニンニク、よい香りのブドウ酒、オレガノ、ジャコウソウ、乾燥マヨラナ、各々均等の量を砕いて、パンで仕上げたて投げ入れよ。

第4章 デーモクリトスの『あらゆる種類の魚を一ヶ所に集めること』

牛、山羊、羊、豚の血、および小腸からの糞便、ジャコウソウ、オレガノ、メグサハッカ、セイバリー、マヨラナ、ニンニク、よい香りのブドウ汁、各々同量、同じ家畜の脂肪あるいは髄^{ずい}を、個々にまた一緒に砕いて、団子にして、それらの場所に1時間前に投げ入れよ、次に網をその辺りに仕掛けよ。

第5章 『すべての魚について』

1. 黒山羊の血、よい香りのブドウ酒の汁、挽割り大麦の団子を混ぜ合わせて、極細かく刻まれた山羊の肺を他のものと一緒に捏ねて用いるべし。2. で、もしあなたが釣糸の周りに塩を撒き散らすならば、誰も魚を捕らえることはないであろう。

第6章 タランティノスの『漁獲について』

1. 私はあなたに望んだ、最も尊敬される人よ、魚に関する性質をより確実に明らかにするよ、いわば、生命、および交尾、および繁殖、および魚の生命の長さ、および魚のうちのどれが海のもので、またどれが川のもので、またどれが沼沢地に生息するものかを。次に特徴に従って、魚のどれに鱗があり、またどれが刺のある魚で、またどれが軟皮類で、またどれが軟殻類であり、またどれが胎生で、またどれが卵生で、また魚のどれが群生せず、また魚のどれが互いに好み合いくまたどれが互いに食べ合い、> そしてどの魚が絶対に互いに攻撃し合わないかを。2. というのも私はそれほど果敢に研究に着手することを望んだ、海に生息する動物の何一つとして私の目が行き届かないことのないように。だが、一方においてわれわれはこれらのことについて時宜にかなって取り上げることにしよう。3. 他方において今、私は、各々の議論に関してある人々が熱望しており、果敢にそれに向かっているのを知って、必然的に私は公私の言葉ですべての期待に大いなる満足を与えるであろう（このこと自体がそのように要求しているので）、そしてアスクレーピオス、およびマネトー、およびパクサモス、およびデーモクリトスがそれらについて

明らかにしたこと、それらすべてから私は知識を与えるであろう。

第7章 魚の餌

1. ボラの、アカエイの、カサゴの、エロップスの、タイの、^{カルクウス}マトウダイの、^{スカロス}ブダイの、グラウコスの、アカボラの、カツオの、ダツの、美魚の、マグロの、マアジの、サケトスの、黒い尾の魚の、スマリスの、アタマの、^{多足}多足の、キツネザメの、ボークスの、^{イガイ}ネズミの、^{マルミューロス}マルミューロスの、スミュレーの、コウイカの、ポーキスの、オオエビの、シビレイイの、ニジベラの、アラベースの、^{ザルギオン}サルギオンの、^{小エビ}小エビの、カラキアスの、ウシノシタの、ヘダイの、アレアントウリスの、^{トリツサ}イワシの、イッロスの、アニオスの、プロスパンタミオイの²⁹、若マグロの、海の小魚用の、たとえばハゼの、ゲナリスの、ダコスの、コイロスの、サメの、レピドートスの、ハタの、レウコーピスの、ウツボの、コガラスの、オオエビの、ウナギの、ホラガイの、ラティロスの、ムラサキガイの、スズキの、そしてあらゆるシーズンにおけるすべての魚用の、また小魚用の。2. まずはじめは、イッロス、グラウコス、タイのような大魚用の餌。同様にすべての大魚用の。3. というのは、その餌は、釣針につけて水面に達するや否や、大魚の到来を恐れている小魚を引き離す。4. 大魚は餌本来の甘さに誘われて自分の穴から出てくる、2スタディオ³⁰離れていても。本能的にやって来た魚は戯れかつ互いに争い合う、また魚は餌の魅力によって引き寄せられる、その結果それらの魚が飛び跳ねて反抗することも、釣糸を引き裂くこともないように。

第8章 餌の配合

大ナマズ、オート麦8ドラクマ、飛散する炎色の綿毛(冠毛)³¹、アニス、山羊のチーズ各々4ドラクマ、オポパナクスの樹液2ドラクマ、豚の血4ドラクマ、オオウイキョウの樹液4ドラクマ。すべてを一つずつ注意深く砕いて、そして一緒に混ぜて、生の辛口のブドウ酒を注ぎ込むべし、そして粒状にして、燻すように、日陰で乾燥させよ。

第9章 巨大なコガラスを釣るためだけの別の配合、最良の餌

炒ったレンズ豆8グランマ、炒ったヒメウイキョウ1ドラクマ、未熟なブドウ、生ボラ4ドラクマ、ボタネー・コロノポディオ³²4ドラクマ、苦い、すなわち生のアンテュアリオン³³1ドラクマ、ナツメヤシの実4ドラクマ、カストリオン³⁴1ドラクマ。すべてを細かく砕いて、それらをイノンドの汁で混ぜ合わせよ、そしてそれらを粒状にして用いよ。

第10章 川の小魚用の餌、(オッピ) アノスがそれを用いていた

仔牛の血と仔牛の肉を細かく切り刻んで小皿に投入せよ、10日間放置してそのあとそれを釣針に付けよ。

第11章 餌、そこに魚が進んでやってくる

挽割り大麦を混ぜて団子を作り、餌にして投げ入れよ。

第12章 川の小魚用の(餌)

1. 大麦の殻2ムナ、無傷のレンズ豆1コイニクス、それらを混ぜて純正ガロスの十分な液に浸すこと。ゴマ1コイニクスを投入して、そこから極僅かを撒き散らして、網をかけよ。2. と

いうのは撒くと同時に、すべての小魚がやってくるだろう。またもし5スタディオン離れていても、同様にやってくるであろう。3. で、大きな魚はその臭いから逃れるだろう。ともかくこのように用いよ、そしてあなたは獲物を捕えるだろう。

第13章 コイロス用の

ゴマ4ドラクマ、ニンニクの鱗茎^{りんけい}2ドラクマ、塩漬け用のウズラの肉2ドラクマ、オポバナクスの樹液1ドラクマ。粘着性の物質ですり潰して取り出し、そして粒状に捏ねて用いよ。

第14章 ウナギ用の

ゴカイ8ドラクマ、川エビ8ドラクマ、ゴマの実1ドラクマ。それらを採取して用いるべし。

第15章 海のボラ用の

シナモンの葉1スパイリオン³⁵、コショウ^{コショウ}10粒、黒バキン3粒、イグサの花、あるいは花の中味を少々、すべてをすり潰して混ぜよ、次に純正のパンの中味をマレアブドウ酒1コテュレーの中に浸して乾燥したものを取り出せ、そしてそれを前者と合わせて一つにして釣針に付けよ。

第16章 成魚のボラ以外は何も釣らないための別の餌をうまく作ること

マグロの肝臓4ドラクマ、海のエビ8ドラクマ、ゴマ4ドラクマ、挽割り麦8ドラクマ、生カツオ2ドラクマ。ブドウ汁の香りの中でそれらをすり潰して取り出せ、そして粒状にして釣針に付けよ。

第17章 海のボラの餌

雄羊の一部分を生の小ヤハズエンドウに入れて、別の小ヤハズエンドウで被って固めよ、息がかからないように、そして朝から晩まで稼働しているガラス製造用の炉の中に入れてよ、そしてあなたはそれが、チーズのように、柔らかくなるのに気付くであろう。そのとき釣針に付けよ。

第18章 名称はプトツラトス、海での魚の餌、その餌で魚が一ヶ所に集まる

岩場付近に生じる海のカキ3個を捕らえよ、それらの肉をそれらから取り出して、貝殻に以下の名を書き記すべし、そしてすぐにあなたは一ヶ所に群れている魚を見るでしょう、驚くほどに。で、名称は、イアオー、サバオートウ³⁶である。魚を食べる人たちはその名称を用いている。

第19章 アカボラおよび大きなブダイ用の餌、水中において役立つように、餌の迅速さゆえに小魚がそこに近づかない。だが配合は自然に保たれる。

川魚テュプリーノスの肉8ドラクマ。焼かれた無傷のレンズ豆8ドラクマ。川エビ4ドラクマ。シナモン1ドラクマ。それらをよくすり潰して鳥の卵白で和えて、粒状に捏ねて用いよ。

第20章 海の生息するすべての巨大魚用の、例えばグラウコス、サメ、ハタ、およびこの種の魚一方で雄鶏の睾丸8ドラクマを、他方で松の果実16ドラクマと一緒に、炒って潰す。それらを小麦粉のようによくすり潰し、粒状に和えて、それを釣針に付ける。

第21章 ウツボ用の

川の大ナマズ16ドラクマ、野生のヘンルーダの8ドラクマ、仔牛の脂肪8ドラクマ、ゴマ16ドラクマ。潰して粒状にして用いよ。

第22章 多足およびコウイカ用の

岩塩16ドラクマ、山羊のバター8ドラクマ、滑らかな粒状のものを作って、ロープあるいは縁取りのない帆に塗りつけよ、というのはその時多足およびコウイカはその周りで餌を食うであろうし、逃げ去ることもないであろう。で、あなたはすぐに引き上げよ、そして船の中に注ぎ込め、オオエビを、ホラガイを、ムラサキガイを、またある限りのものを。

第23章 ウナギや貝をこのようにして誘き寄せる

岩塩8ドラクマ、タマネギ1ドラクマ、仔牛の脂肪6ドラクマ。海緑色の釣針シデーリオンを作れ、調合薬で釣針に塗りつけて、用いよ。自発的に臭いに誘われて出てくる、そして自分の身を委ねるであろう。

第24章 すべての時期におけるすべての魚用の餌

1. ケルト・ナルトの葉4 [ドラクマ]、カヤツリグサ1ドラクマ、ムラサキハナウドのエジプト豆の大きさ、三指で測れる量のカミン、イノンドのタネ一握り。それらを潰して篩にかけて小さな葦よしの中に注ぎ込め。2. 必要に応じて、ぜん虫あるいはミミズを取って、よく洗え、そして容器に入れよ、その場で湿ったエングラウリスを手でぎゅっと絞れ、そして満たされたるものを薬で混ぜ合わせよ、そしてぜん虫を分厚い軟膏の中に注いで、そしてその時取り出して餌として用いよ。

第25章 葦で捕らえられる小魚用の

1. 川エビ1コイニクス [ドラクマ]、塩漬けコガラスの純正のガロスに漬けられ、二日間塩漬けにされたものを、三日目に釣針に付けよ。2. 四つずつ釣針の付いた二本の葦で釣れ、自分自身と一人の補助者を得て、あなたはそれほどの獲物を得るでしょう、投網をもってしても注ぎ込めないほどの、他の漁師に後れを取ることがないほどの獲物を。

第26章 通常の餌

レンズ豆の煎じたものを乾燥澱粉と一緒によく潰して、また混ぜ合わせて、それを用いよ。

第27章 すべての小魚用の

キサゴの肉を取って、小さな尾を除いて、それを餌として用いよ、カタツムリの大きいものを用いるのではなく。

第28章 釜うけについて

ドンダリの粕、人糞、きれいなパン、各々をそれ自体ですり潰して、三つのものを混ぜて、そして釜に投じて用いよ、あなたはうまくいくでしょう。

第29章 釜かすについて その他

魚を食べる人たち³⁷の餌、彼らはそれで釣っている、私が書かれたものを見つけ出したように。岩場にいる貝³⁸と呼ばれているものを、また肉片を採れ、そしてそれで釣れ。

第30章 海のボラ用の

ブダイの、赤ボラ用の、コウイカの骨(甲) [1ドラクマを]、緑色のベルモット・ハッカ、そ

れはアオサである、および水、および小麦粉、および牛乳のチーズと一緒に混ぜて用いよ。

第31章 カサゴ専用の

桑の木のおがくずを、およびアーティチョークの茎、および鶏冠石（硫化砒素）8ドラクマ、キャベツに付くイモムシ5匹および小麦と一緒に。細かく挽かれた小麦。そして砂と一緒に混ぜ合わせ、水を注ぎこんで団子を作れ、そして餌として用いよ。

第32章 海のタイ用の

黒クミンの煎じたものをバツタとぜん虫と一緒に、また小麦粉と一緒にすり潰せ、次に水を注ぎ込み、そして蜂蜜の濃さにして、餌として用いよ。

第33章 ダツ専用の

仔牛の胆汁を挽割り大麦とオリーブ油と水で混ぜて小さな団子にせよ、そして餌として用いよ。それを噛み砕いて水の中に吐き出せ、そして魚があなたに近づくでしょう。

第34章 マグロ専用の

クルミ5個を焼いて、灰になるまで、マヨラナと一緒に潰して、水で湿らされたきれいなパンと山羊のチーズと一緒にすり潰して、団子にして用いよ。

第35章 スマリス用の

ニンニクを砕いたあと、パンと、牛と山羊のチーズと、よく篩の掛けられた小麦粉と一緒にすり潰して、団子にして（丸めて）餌として用いよ。

第36章 海のアカエイ用の

鳩の糞を細かく挽いた小麦粉と一緒に水に浸して混ぜよ。

第37章 同種用の その他の

レタスの種を煮て、バターと細かく挽いた小麦粉を注ぎ込み、煮出したものを捏ねよ。

第38章 サルペー用の

岩場で採れた緑アオサをオリーブ油で（煮て）、餌として用いよ。

第39章 グラウコス用の

カツオ、美魚、海のカタクチイワシを焼いて骨を取り除いて、アオサと大麦粉と一緒に搗いて、団子にして（丸めて）餌として用いよ。

第40章 マグロ、黒い尾の魚用の

驢馬の糞を緑コエンドロの汁の中で浸して、細かく挽いた小麦粉と一緒に団子にして（丸めて）餌として用いよ。

第41章 ボラ、アタマ用の

極上の小麦粉のパンと山羊のチーズと生石灰と一緒に混ぜて搗け、そして海水を注ぎ込み、そしてそれで〔団子〕を作って、餌として用いよ。

第42章 多足用の

ある種の堅いものに細い紐ひもで小さなヤリダイを数匹縛って誘き寄せよ。

第43章 コウイカ専用の

水を含まないブドウ酒の澱おりをオリーブ油で捏こねて、その場所に来てそれを海に投げ入れよ、澱が沈むのを、イカが墨を噴射するのを、またイカがオリーブ油があらわになっているその場所にやってくるのを確かめたら、ぐずぐずせずに捕らえよ。

第44章 オオエビ用の

何か途方もなく強力なものにヤリダイを縛りつけて、オリーブ油と一緒に10個のムラサキガイをすり潰して、アオサの小さなものを岩場に撒き散らし、そしてあなたは捕まえる。

第45章 黒い尾の魚用の

山羊の肝臓を取って、それをあなたの釣針に付けよ。で、もしわれわれが別の獲物を穏やかな海に見つけたならば、あるいは多くの魚に対して、山羊の、あるいは驢馬ひづめの蹄を釣針に付けよ。

第46章 ガロスガロス魚醬の作り方

1. いわゆるリクーアメンはこのようにして作られる。魚の内臓を容器に入れて塩漬けにする。また小魚、とりわけトウゴロイワシ、あるいは小さなアカボラ、あるいは雑魚イワシ、あるいはカタクチイワシ、あるいは小魚と思われるもの、すべてを同じように塩漬けにする、そして頻繁に掻き回して太陽の下で寝かせておく。2. 熱で塩漬け貯蔵された後、それからガロスがこのようにして取り出される。密に編まれた大きな籠がすでに言及された小魚で満たされた容器の中に入れられる、そしてガロスが籠アリックスの中に流れ込む、彼らは籠を通して漉されたもの、いわゆるリクーアメンを取り出す。で、残りかすが魚汁となる。3. だが、ビテュニア人はこのように作る。彼らは一方において、もしあればよりよいのだが、小さなあるいは大きなイワシを、もしなければ、カタクチイワシ、あるいはトカゲウオ、あるいはサバ、あるいはまた魚汁、およびすべての混ぜ物を取る、そしてそれらを平鍋の中に投入する、その中で小麦粉を混ぜる慣わしだった、また魚1モディオス³⁹の中に塩2イタリア・クセステース⁴⁰を投入してよくかき混ぜる、塩がよくなじむまで。次に彼らは一晩放置する、そして彼らは壺に移す、そして壺の蓋を開けて2ないし3ヶ月間日に晒さらす、間隔をおいてそれを棒でかき回し、次にもってきて蓋をして貯える。4. だがまたある人々は魚1クセステースの中に古いぶどう酒2クセステースを注ぐ。5. 次にもしあなたがすぐにガロスを使いたければ、すなわち、それを日に晒すのではなく、煮ること、このようにあなたは作るでしょう。塩水のテストをして、投げ入れられた卵が上に浮かぶ程度に（で、沈むならば、塩が足りない）、次に新しい壺に入れられている魚を塩水の中に入れて、またオレガノの中に入れて、強火にかけよ、煮詰まるまで、すなわち、煮崩れが始まるまで。またある人々はそれにブドウ汁を加える。次に冷やされたものを漉し器に投入して、それを二・三回漉して、きれいになるまで、そして蓋をして貯えよ。6. 上質のガロス、いわゆるハイマティオンはこのようにして作られる。マグロはらわたの腸を鰓と血清と血といっしょに取り出す、そして塩をたくさん振りかける。壺の中で寝かせて、通常2ヶ月後、壺に穴が開けられる、するとハイマティオンと呼ばれるガロスが出てくる。

- 1 よく知られていない海水魚。『動物誌』に2度（505a15, 506b16）現われる。Cf. *GF* 62f.
- 2 その名称から、おそらく灰色の魚。ハゼの一種か。『動物誌』に数回（508b20, 598a13, 599b32, 607b27）現われる。Cf. *GF* 48.
- 3 原語は、文字通り **κάλλιχθυς**。「美しい魚」の意。海水魚。Cf. *GF* 98.
- 4 よく知られていない魚。Cf. *GF* 224.
- 5 原語は、文字通り **μελάνουρος**。「黒い尾」の意。海水魚。『動物誌』に1度（591a15）現われる。Cf. *GF* 159f.
- 6 小さな海水魚。『動物誌』に1度（607b22）現われる。Cf. *GF* 247f.
- 7 原語は、文字通り **κέφαλος**。「頭」の意。ボラの一種。『動物誌』に1度（543b16）現われる。Cf. *GF* 110ff.
- 8 この名称は鳴き声からきている。ブーブー鳴く魚。『動物誌』に1度（610b4）現われる。*GF* 36f. の **βῶξ** の項目を見よ。
- 9 LSJ, s. v. **σμούλη** を参照。魚とあるが不詳。
- 10 LSJ, s. v. **φακίς** を参照。魚の一種。但し、不詳。
- 11 ナイル川の魚。cf. *GF* 9.
- 12 LSJ, s. v. **χαρακίας** を参照。タイ科の魚。*GF* 284f. の **χάραξ** の項目を見よ。
- 13 原語は、文字通り **βούγλωσσος**。「牛の舌」の意。カレイ・ヒラメの類。*GF* 33f. の **βούγλωσσα** の項目を見よ。
- 14 原語は **άλεαντρίς**。おそらく、**έλεωτρίς** の誤読。cf. *GF* 10. とすれば、ナイル川の魚。*GF* 62 の **έλεωτρίς** の項目を見よ。
- 15 原語は **ΐλλος**。ΐουλος (=ΐουλίς) か。cf. *GF* 91.
- 16 原語は **άνιον**。あるいは **άνθιον** (Needh.) か。後者であるとすれば、原語は **άνθίας**。おそらく、海水魚の一種。**άνθίας** は『動物誌』に3回（570b19, 610b5, 620b33）現われる。cf. *GF* 14ff.
- 17 タラ的一种。cf. *GF* 43.
- 18 不詳。cf. *GF* 51.
- 19 LSJ, s. v. **χοῖρος** を参照。ナイル川の魚。cf. *GF* 291.
- 20 原語は、文字通り **λεπιδωτός**。「鱗に被われた」の意。エジプトで聖魚。cf. *GF* 148ff.
- 21 不詳。名称から「白い魚」か。cf. *GF* 150.
- 22 LSJ, s. v. **κορακῖνος** を参照。この魚はその色からそう呼ばれたらしい。つまり、「黒い魚」。κορακῖνος は『動物誌』に数回（543a31, 570b22, 571a25, 599b3, 602a12, 607b24, 610b5）現われる。cf. *GF* 122ff.
- 23 魚あるいは貝の疑わしい名称。Cf. *GF* 144.
- 24 LSJ, s. v. **τυφλῖνος** を参照。ナイル川の魚。*GF* 272 の **τύφλη** の項目を見よ。
- 25 原語は **έγγραυλίς** (= **έγκρασίχολος**)。LSJ, s. v. **έγγραυλίς** を参照。**έγκρασίχολος** は『動物誌』に1度（569b27）現われる。カタクチイワシ科の魚。Cf. *GF* 58.
- 26 原語は **κόχλος**。『動物誌』の 528a1, 10 を見よ。海産巻貝類。cf. *GF* 132.
- 27 LSJ, s. v. **σάλπη** を参照。『動物誌』に4回（534a9, 543a8, 543b8, 570b17）現われる。タイ科のヒラダイ。今日キクラデス諸島で *salpa* と呼ばれている魚。cf. *GF* 224f.
- 28 LSJ, s. v. **Σινωπική** を参照。「赤土」のこと。cf. Plin. *HN*. 30.75.
- 29 原語は **προσπανταμίων**。この語については **πρὸς πάντα ἀμιῶν** と **πρὸς πάντα ποταμίων** という二つの読み方がある。ここでは原文のままを記した。
- 30 1 スタディオンは 177.6 メートル。
- 31 アザミの綿毛。
- 32 原語 **κορωνοπόδιον** は **κορωνόπους** の指小辞。Cf. Plin. *HN*. 21.99, 22.48. 植物の名。
- 33 LSJ, s. v. **άνθύλλιον** を参照。Cf. Plin. *HN*. 21.175, 26.84. 植物の名。
- 34 原語は **καστόριον**。Cf. Plin. *HN*. 32.26. 「ビーバー香（海狸香）」のこと。
- 35 一般に「錠」あるいは「粒」と訳出されるが、この場合は「枚」かもしれない。あるいは量を表す「単位」かもしれない。
- 36 原語は **Ίαώ Σαβαώθ**。最も神聖な名。**Ίαώ** は Yahweh の意。
- 37 第18章参照。

- 38 原語は *πωμάτιον* (= *πωματίας*). Cf. LSJ, s.v. *πωμάτιον*. この場合の貝は 18 章から推測してカキのような二枚貝のことか。
- 39 固形物の単位。1 モディオスは 6 分の 1 メディムノス。1 メディムノスは約 52 リットル。
- 40 1 クセステースは 1 pint.

略記

- LSJ H. G. Liddell, and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, 9th edition revised by Sir Henry Stuart Jones, Oxford, 1925-40.
- GF D'Arcy W. Thompson, *A Glossary of Greek Fishes*, Oxford, 1946.
- 『動物誌』 アリストテレース (島崎三郎訳) 『動物誌』 上・下巻、岩波文庫、1998-9。
尚、テキストは第 1 - 6 巻は A. L. Peck 版 (Loeb) を、第 7 - 10 巻は Leonardus Dittmeyer 版 (Teubner) を用いる。